The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バウムテストにみる加齢の研究 : 生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討
Author(s)	小林, 敏子
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36757
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【101】

氏名・(本籍)	小林敏子（こばやし　としこ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第　8956　号
学位授与の日付	平成2年2月2日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**バウムテストにみる加齢の研究** **——生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討——**
論文審査委員	(主査) 教授　西村　健 (副査) 教授　白石　純三　　教授　荻原　俊男

論文内容の要旨

（目　的）

バウムテストは，Karl Kochによって1949年にあらわされた“Der Baum-test Der Beziehungsversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel”に記載された性格テストであるが，発達や治療過程を検討するテストとしても有用であると広く認められている。筆者らは，10余年前よりバウムテストを老年期の精神障害の臨床に際して使用した結果，老年者の知能の衰退状況や心理状況を知る上で，本テストが有用であると考えられるようになった。現在，バウムテストの発達に関する研究や青年期や壮年期の精神障害に関する研究は多くみられるが，老年期の加齢や精神障害に関する報告は少ない。本研究は，老年期の生理的加齢ならびにアルツハイマー型痴呆にみられるバウム（樹木画）の特徴と知的機能の衰退状況ならびに心理的退行状況との関係について検討することを目的として行った。

（方法ならびに対象）

本テストは，A4版大の画用紙を縦長方向に置き，B4鉛筆を用い，「実のなる木を一本描いて下さい」と指示して行った。生理的的加齢対象群は心身共に健康で社会適応の比較的良好な30歳代から80歳代に至る在宅の男女513名である。痴呆群は，筆者が58年4月から63年3月までの間に診察し，経過をみているアルツハイマー型痴呆88例である。バウムテストには，知的活動状況，心理的状況，性格等種々の精神的な側面が投影される。それらは各個人に独特のものであるが，各自の心身の健康状態や環境状況により影響を多く受けるので，痴呆群の対照群としては，年令と居住場所をマッチさせた健常老人86例を選んだ。判定は，次の4側面から行った。①各種指標の分析，②全体的印象の分析，③形態的分析，④空間象徴的分析，である。①生理的加齢群における年齢階層の有意差検定および痴呆の軽，中，重度

の各重症度群と対象群との有意差検定はX^2検定を使用した。

（結　　果）

生理的加齢とともにみられるバウムの変化は，下記のものであった。

樹木の縮小傾向，樹冠部の豊かさの減少，幹先端処理や枝・葉の描写における精密さの減少，簡略化と象徴的表現の増加，樹の高さに対する幹の太さの比率の減少，樹冠の高さに対する幹の高さの比率の増加，筆圧の弱圧化，枝の一線枝化，地平の消失，幹先端開放，一線幹，枝立体描写の減少，木としての力動感，生気感の減少，形態水準の低下傾向などである。

痴呆群においては，上記の生理的化齢群にみられた変化がより高い頻度で出現し，更に生理的加齢群ではほとんどみられない下記のような変化を示すものがみられた。

極小の樹木（樹高5㎝以下の木），形態のくずれ（不良形態），幹上直および鋭，全空間倒置，空間使用領域の著しい偏位などである。

これらの変化は，痴呆が重度になっていくほど，出現頻度が高くなる傾向がみられた。痴呆軽度群でコントロール群と有意差のみられたのは，縮小（$p<0.001$），地平の消失（$p<0.01$），一線幹（$p<0.01$），幹上直（$p<0.01$），幹先端処理判定困難（$p<0.01$），幹表面空白（$p<0.01$），枝の数（4－10本）の減少（$p<0.05$），全一線枝（$p<0.05$），筆圧強の減少（$p<0.05$），木としての力動感・生気感に欠ける（$p<0.001$），木としての形態不良率（$p<0.001$），形態のくずれ（$p<0.01$），などであった。これらの指標の出現率の差は，アルツハイマー型痴呆における知的機能の衰退を主に反映すると考えられるが，抑うつや，自己像の萎縮，自我機能の低下，人生のより若い時期への愛着などの心理的退行も反映すると考えられた。アルツハイマー型痴呆のごく初期のものでは，情緒面の安定している場合には，生理的加齢群との違いをほとんど見出すことが出来ないケースもみられ，記銘力障害を主とするごく軽度の知能の低下をバウムテストで判別することは困難と考えられた。しかし，さらに知能の低下が進み，軽度痴呆・中等度痴呆となる段階では，前述のような種々の指標を示すものが多くみられ，バウムテストによって，病者の心理的状況や痴呆の程度をある程度判定することが可能であると考えられた。

筆者の経験では，知的正常者でも身体疾患（特に心疾患や脳循環障害など）がある場合や抑うつなどの精神症状のある場合は，縮小や地平の消失，下向枝，木としての力動感・生気感の減少，空間使用領域の偏位などの出現頻度が高くなる。しかし，このような場合には，形態のぐずれや幹先端処理の判定困難などはみられず，臨床的な所見を参考にすれば，痴呆との鑑別は容易である。脳血管性痴呆でもアルツハイマー型痴呆と同様の変化が多くみられるが，形態のくずれや領域使用のあり方などでは＃＃＃みられた。今後その相違点については検討したく考えている。

論文の審査結果の要旨

本研究は，バウムテストにみる加齢の変化を生理的加齢群および病的加齢が進行するアルツハイマー

型痴呆群において検討したものである。

その結果，生理的加齢に伴う樹木画（バウム）の変化として，樹冠の高さに対する幹の高さの比率の増加，木の高さに対する幹の太さの減少，空間使用量の減少，その他検討57項目中29項目に有意の変化があることが示された。アルツハイマー型痴呆のバウムでは，生理的加齢に伴ってみられる変化がより高頻度で出現し，さらに生理的加齢においてはみられない極小のバウム，形態のくずれ，木としての力動感・生気感の低下，空間使用領域の偏位などがみられ，アルツハイマー型痴呆における病的な知能の衰退や自己像の萎縮，自我機能の低下，心理的退行などがバウムに反映されることが示された。

以上，本研究は生理的加齢および病的加齢にみられる樹木画の変化を多項目にわたり検討し，バウムテストにみる加齢の変化を明らかにした点で意義があり，学位に値するものと評価する。